仔猫の裁判

槇本楠郎

青空文庫

「こどもクラブ」では、日曜日ごとに、朝の九時半から正午まで、子供会がありました。このクラブは、町の大人たちのつくつてゐる「睦会」の二階で、六畳の間二つが、ぶつ通しになる明るい部屋でした。

表の間の天井のまん中からは、色テープが八方に引きまはされ、それには、葡萄の葉や果がブラ下つたやうに、色さまざまの紙かざりが吊り下げてありました。折紙細工の鶴や舟や兜や股引や、切紙細工の花や魚やオモチヤや動物など、みんな子供会の手工の時間に作つたものです。

壁際には三つの本箱が据ゑられ、それにみんなに寄付してもらつた、色々の本や雑誌がギツシリつまり、「資料箱」の上には、木琴や積木や智慧の環や、それから地球儀や、環投げ遊びの道具などもありました。

壁には、子供会の写真や図画、それから「壁新聞」や「子供会ニユース」、ピクニツクのとき持つて行くリユツクサツクなど、いろいろのものが貼つたり、懸けてありました。

だが、このキチンとした「こどもクラブ」も、今日は、ひどくかき乱され、子供会に集つた子供たちも、昂奮して立ちさわいでゐました。

「泥棒のしわざだ！」

「泥棒が凧なんか滅茶々々にするかしら？」

「地球儀がないぞツ。」
「頭だけここにあつたわよ。」
「足はないかア……地球儀の足々？……」
「凧のしつぽなら、ここにあらあ――」
「凧の骨も皮も、ここにありまアす。」
「犯人を引つぱり出せ！」
「凧を破つたのは誰だいツ？」
「誰か知つてる者はないかア？」
男の子も女の子も、折角この前の日曜日の子供会でつくつた大凧を、何物かに滅茶々々にされて大騒ぎなんです。
「みんな静かにしてくれエ！　みんな立ちさわがずに、坐つてくれたまへ。」
表の間の窓際に立つたコドモ委員の一人が、手をふり上げてかう叫びました。すると他の子供たちも、同じやうに叫びました。
「みんな静かにしろツ！」
「みんな坐れエ！」
「オーライ！　O・K！」
「シツ！」

「お静かに願ひます。ご順に前へおつめ下さい――」

「動きまアす、チン〳〵！」

みんなドツと笑ひました。けれど、暫くするとみんな坐つて、窓際に立つてゐるコドモ委員の方を見つめました。

コドモ委員は六人で、男の子も女の子も、みんな選挙された者です。その中で、一番脊の高い木村君が、みんなの鎮まるのを待つて、突つ立つたまま、かう云ひました。

「みんなの騒ぐのは無理もないと思ふが、でも、てんでにガヤ〳〵やつてたんぢや、いつまでたつても、きりがつかないと思ふ。そこでね、僕たちコドモ委員で相談したんだが、みんな、かういふことにしたらどうだらう。子供会の始まるまでには、まだ少し時間もあるし、先生も来てゐないんだから、それまでにみんなで、誰が僕たちのつくつた凧を滅茶々々にしたり、地球儀の足を折つたのか、それを考へ合つて見ようぢやないか？　みんな、どうかね？」

「いいわ！」

「大さんせい！」

「それがいい！」

そこで、みんな相談し合ふことになりましたが、いろいろの意見が出て、結局、次の三つに分れてしまひました。

（1）下の部屋には、いつでも留守番のお爺さんか、お婆さんがゐるはずだが、ちよつと

家を空けたすきに、泥棒が入つて、何も持つて行く物がなかつたので、乱暴をして逃げたにちがひない。

（2）どこかのいたづらツ子が、子供会の者のやうに見せかけて、眼のうすいお爺さんお婆さんをごまかしてしのびこみ、いたづらをして逃げ出したにちがひない。

（3）昼間でもよく天井で鼠が騒いでゐたし、それに困つて、お爺さんお婆さんが仔猫を飼つたくらゐだから、きつと、鼠のしわざにちがひない。

この三つの考へ方には、それぞれ賛成者があつて、さかんに議論をし合ひました。

そこへ先生がやつて来ました。

子供たちは、パチ〳〵と手を叩いて先生を迎へ、コドモ委員たちは先生をとりかこんで、今やつてゐることを、くはしく話しました。そしてかう附け加へました。

「みんな熱心なので、もう少しつゞけさせて下さい。なか〳〵面白いんです。」

「いいでせう。やりたまへ。」

先生は気持よくさう云つて、長い頭の髪毛をグシヤ〳〵とかき上げると、今度はみんなの方へ向いて、かう云ひました。

「今日は対話文の作り方と、唱歌をやるはずになつてゐるが、今聞くと、この前、君たちのつくつた凧がこはされてしまつたさうで、そのことについて相談してゐると云ふことだから、僕もその仲間に入つて、これからもう少し順序を立てて、その問題をおし進めて見たいと思ふ。

どうだね、いいですか？」

「さんせい！」

みんなパチ〳〵と手を叩きました。

「ぢや、どういふ風にやつて行かう？」

先生がかう云ふと、すぐ、一人の男の子が突つ立ちました。尋常四年の水野（みづの）といふ子で、ほつそりした、色の白い、賢い子供です。

「僕は、さつきから黙つて聞いてゐましたが、みんなてんでにしやべるので、いつまでもケリがつかないんだと思ひます。だから、先生に整理係になつてもらひたいと思ひます。」

「さうだ！　それがいい！」

「さんせい！」

また、みんな手を叩きました。

「では、僕がさういふことになります。そこで、どんなことからやつて行きませう？　僕の考へでは、みんながいろ〳〵の意見を出すのは勿論（もちろん）いいことだが、それより前に、こはされたもの——例へば凧とか地球儀とかについて、そのこはし方を、よく調べて観（み）る必要はないかと思ふ。泥棒か、いたづらツ子か、鼠か？　そのこはし方をよく観察すれば、そこで初めて、大体の見当がついて来るのではないかと思ふ。どうだらうね？」

「さうだ！」と、コドモ委員の吉住（よしずみ）君が叫びました。「それからだよ。」

「ぢや、みんな観(み)なほせエ。」
「オーライ！　さんせい！」
みんな立ち上りました。
先生は、素早く、こはれた凩と地球儀とを両手に差上げて、子供たちのまん中に入つて来ました。そして、部屋のまん中どころまで来ると、「まるくなれ、環(わ)になれ、坐れ！」と叫びました。
「押すな〳〵。」
「静かに坐れエ！　一(いち)ツ、二(に)ツ！」
やつと、みんな坐りました。坐つたかと思ふと、まだよく凩や地球儀を観ないうちに、もう
「猫だ、猫だ！」と叫び出した者がありました。
「犯人は猫です！」
突然、コドモ委員の木村君が叫びました。つづいて、口々にみんな叫びました。
「爪あとが何よりの証拠だ！」
「毛がくツついてらあ！」
「歯がたもついてらあ！」
「襖(ふすま)も引つかいてらあ――裁判にしろ！」
すると、デブさんの男の子が突つ立つて、出しぬけにかう云ひました。

「僕は、裁判にしたらいいと思ふな。猫をつれて来るぞ。」みんなドツと笑ひました。けれどデブさんはお構ひなしに、トツトと階段の方へおりて行つてしまひました。

「まあ、猫を裁判するんですか？」

「猫裁判だア……ドロ〳〵〳〵や……」

「やれツ〳〵面白いぞオ！」

「やること、さんせい！」

「あたしもさんせい！」

みんな騒ぎ出しました。

「静かに！」と先生は遮(さえぎ)つて置いてから、みんなを見廻(みまは)して、かう訊(き)きました。

「では、凧や地球儀をこはしたものは、猫だとハツキリきまつたわけですね？　さうですか？」

「さうです！」と、みんな答へました。

「よろしい。僕も仔猫だと思ひます。では仔猫を、どうしますか？　いま松尾君の提案されたやうに、裁判にしますか？」

「裁判、さんせい！」

コドモ委員まで「さんせい！」を叫びました。

「では、どんなにしてやりますか？　もう十時過ぎです。なるべく僕は傍聴人にさせてもらつて、君達(きみたち)子供だけでやつて見たら面白いだらうと思ふ。どうかね？」

「やらう！」と、コドモ委員の木村君が呟きました。そしてみんなに相談しました。
「どんな風にでもいいから、僕たちでやつて見ようぢやないか？　みんないいだらう？　だが、どんな風にやるもんかなア？」
「君、裁判官がいるぞ！」
「弁護士もいるぞ――」
みんな口々にしやべり出しました。
「おれ、裁判長になりたいなあ。」
「おれ検事だ！」
「おれ代議士だぞ！」
「ばか！　代議士なんか出るもんかア。」
また木村君が立ち上りました。
「みんな静かにしてくれ。ではね、これから猫の裁判をやらう。ほんとうの裁判はどんな風にやるのかよくわからないが、僕たちの裁判には、一人の裁判長だけ置いて、あとの者はみんな弁護士になつて、猫の悪いことも云へば、善いことも云つて、それで猫の罪をきめることにしようよ。ね、みんなそれでいいだらう？」
「うん、いいよ！」
「それでいい！」

「それでは、裁判長をきめます。誰か、なりたいものはありませんかア？」
「木村君！　君がいいぞ！」
「さんせい、さんせい！」
みんなパチ〳〵と手を叩きました。
木村君は、みんなの方へ向いて、自分の顔に八の字のひげを描いて見せると、今度は先生の顔を見ながら、頭をかき〳〵、「それぢや僕がやります。」と答へました。
「前へ出ろ、前へ！　裁判長は正面だ。」
木村君は、正面の窓際に出て行きました。それから、かう云ひました。
「すぐ猫をつれて来て下さい。」
みんな、ドロ〳〵騒ぎながら、階段口になだれて行きました。そして口々に松尾君を呼びました。松尾君は、便所の中から返事をしました。みんな鼻をつまんで笑ひました。
暫くすると、下へおりて行つた子供たちが大騒ぎしながら、仔猫を抱いたお婆さんをつれて上つて来ました。
「まあ〳〵、なんて申訳ないことをしでかしたんでせう。一体いつ、そんなことをしたんです。え、タマ、さあお云ひ。今朝、わたしがお掃除に上つたのは八時ごろでしたが、その時まで、なんのこともなかつたのに……いつ、どうして、こんないたづらをしたんです。みなさんは、お前を裁判しようと云つてなさるのに、このたはけもの、あくびなんかしをつて。さあ、あや

まりなさい。さあ、みなさんにお詫びしなさい。……死刑にでもなつたら、どうするのです……」

お婆さんはウロ〳〵しながら、仔猫を抱いて、みんなにペコ〳〵と頭を下げました。

「お婆さん〳〵。」と先生が呼びかけました。「そんなに騒ぐことはないんだから、なんなら、その猫を抱いて、あんたも、裁判に加はらしてもらつたらどうかな。裁判長、みんなの意見を聞いて見て下さい。」

すぐ、パチ〳〵と手が鳴りました。

「では、さんせいされたものと思ひ、すぐさま裁判に入ります。猫は悪いことをしたのですから、裁判長の前に坐らせて下さい。」

「うまいぞツ！」誰かが冷やかしました。

お婆さんは仔猫を抱いて、渋々と、裁判長の木村君の前へ出て坐りました。

木村君は可愛い三毛猫を見ながら、自分の頭をかきかき、かう云ひました。

「名を云つて下さい。その方の名は何と申すか？」

みんなドツと噴き出しました。

けれどお婆さんは、真面目に答へました。

「この子は、ものが云へませんので、わたしが代つて申上げます。この子の名はタマと申します。」

「よろしい。苗字(めうじ)は？」

みんな、またドツと噴き出しました。

「苗字は、猫のことで、ございません。」

「ないかア、よし。そんなら年？」

「昨年の九月生れですから、まだ、やつと半歳になるか、ならないかでございます。どうぞ、そんなわけで、罪を軽くしてやつて下さい。」

「よけいなことは云はないで下さい。——では諸君、タマの今日したことを云つて下さい。タマは、どんな悪いことをしたのですか？」

「裁判長！」と云つて、四五人が一度に立ちました。

「今井(いまゐ)君、君から左へ、順々に云つて下さい。」

「僕は、タマがどんな悪いことをしたかと云ふことは、そこに置いてある骨ばかりになつた凧と、足のなくなつた地球儀とを見ただけで充分で、くはしく説明する必要はないと思ひます。」

「わかりました、その次——」

「僕は、もうすみました。今、今井君が云つてしまつたんだもの。」

「あたしもいいの。」

「ぢや、わたしの番よ。わたしはね、タマさんのしたことは、よくないと思ふけど、だつてタマさんは赤ん坊で、よいことか、わるいことかも、知らないんでせう。だから、罪になんか、

しない方がいいと思ふのよ。」

さう云つて勝気な秀子さんが坐ると、パチ〳〵と、女の子たちは手を叩きました。

「ちよつと待つて下さい。」と、裁判長の木村君が云ひました。「どんな悪いことをしたか、といふことをよく調べてゐるうちに、もうどんな罰にするか、といふところまで来てしまひましたから、では、ドシドシ意見を述べて下さい。」

コドモ委員の文子さんが、立ち上りました。

「わたしに、少し意見を述べさせて下さい。わたしは、小さい時、お友だちのお人形をこはしたことがあります。その時、お家に帰つて叱られました。そして、よく云ひ聞かされました。私はそれ以来お人形でもなんでも、特に人のものは大切にするやうになりました。だから私は、猫だつて悪いことをしたら、猫にわかるやうに、云ひ聞かせ、叱らなければいけないと思ひます。ライオンや毒蛇だつて、さうして教へこめば、やがては人の云ふことを、よくきくやうになるんだと申します……」

「さうだ、さんせい！」

「さんせエ！」

みんなパチ〳〵と手を叩きました。先生もお婆さんまで手を叩いてゐました。

そこで裁判長の木村君は、かう云ひました。

「只今の文子さんの意見は、満場一致で、賛成されたやうに思ひます。では、どういふ方法で

タマをこらし、躾をしますか？」

　すると、いつ便所から帰つて来てゐたのか、デブさんの松尾君が、ひよつくり立ち上りました。そして、ブツキラボーに云ひました。

「裁判長、僕は猫の頭に頬冠をさせて、そこいらを逆さに、這はせたらいいと思ふな。どうだい、おもしろいぞオ。」

　みんなクス〳〵笑ひ出しました。だが誰か一人パチ〳〵と手を叩いたので、皆なつい釣りこまれて、賛成するのか、からかふのか、どつち附かずに手を叩いてしまひました。そして手を叩いてゐるうちに、みんな、猫に頬冠をさせて逆さに這はすことが、とても堪らなく面白く愉快に思はれて来ました。そして裁判長が、今の意見に賛成かどうかをたづねた時には、コドモ委員まで、うつかり巻きこまれて、一人残らず賛成してしまひました。

「では、みな賛成のやうですから、これから猫に頬冠をさせることにします。だが裁判長として意見を述べさせてもらへば、かういふことでは、ほんとうは仔猫のいたづらは直せないと思ひます。――とにかく、今日の猫の裁判はこれでをはりにします。」

　みんな暫くの間、パチ〳〵と手を叩きました。そしてやがて、広い場所をつくるために立ち上りました。

　仔猫のタマは、そんなことは少しも気にかけぬらしく、お婆さんの膝の上で長々とあくびをすると、それから唾をつけて顔を洗ひ、眉毛をなで、口ひげをしごき、しきりに雌猫らしく、

おめかしをしはじめました。

―昭和八年三月五日作―

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　三〇巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「仔猫の裁判」文章閣
　　1935（昭和10）年11月
初出：「教育論叢」
　　1933（昭和8）年5月
※表題は底本では、「仔猫《こねこ》の裁判」となっています。
入力：菅野朋子
校正：雪森
2014年6月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仔猫の裁判

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/